

I 実践

1 縦割り班活動における体験活動

30分のロング昼休み（キッズタイム）に、月に1回程度、縦割り班活動を行っている。全校児童を、異学年で12のグループに編成し、6年生が中心となって外遊びをしている。遊びの内容は鬼遊びやドッジボールが多いが、高学年が新しい鬼遊びを提案したり、ある学年で行った遊びを縦割り班で行ったりして、年々種類が増えている。異学年で遊んだり、話し合ったりすることで、いろいろな友達と関わりをもつ時間となっている。

また、遊びだけでなく、6月と11月に愛校作業を取り入れている。異学年集団で行うことにより、一人一人が自分の立場を考えた行動をとり、周囲の友達を思いやる態度を育てるよい機会となっている。



縦割り班での遊び



愛校作業

2 ふれあいの会における高齢者との交流

本校体育館で行われる油縄子地区の敬老会（ふれあいの会）に参加し、学年の発表だけでなく、ふれあいの時間も設定して交流を深めている。ふれあいの時間には、5・6年生がお年寄り一人一人に飲み物やお茶菓子を配り、事前に準備していた昔遊びを一緒に楽しんでいる。また、運動会の敬老種目でも、4年生が競技終了後にお年寄りの肩もみをする時間を設定している。

3 養護学校との交流

4学年の児童が日立養護学校との交流を行っている。本校と日立養護学校は、多賀中学校を挟んで敷地続きになっていることを生かし、毎年取り組んでいる。児童が中心となって集会を計画し、自己紹介やゲームを通して互いを知るよい機会となっている。

4 成果

- 縦割り班活動では、遊びだけでなく様々な活動を取り入れることで、場面によって自他の立場を考えながら、思いやりの気持ちをもって相手に接することの大切さを学び、互いに助け合い支え合っていこうとする気持ちが高まってきている。定期的に活動することで、前回うまくいかなかったことが次はうまくできるようになったり、円滑に進められるよう

に工夫したりと児童の主体性を育てることができている。

- ・ふれあいの会での交流では、短時間ではあるが、地域のお年寄りとのかかわりを深めるよい機会となった。お年寄りと直接ふれあう時間では、はじめはどう接していいのかわからない児童が見られたが、慣れてくると遊びを教わったりいろいろな話をしたりする姿が見られた。お年寄りに喜んでもらうことで、自己有用感を高めることができた。
- ・総合的な学習の時間での取り組みでは、養護学校への訪問を通して、高齢者や障害のある人について理解を深めるとともに、互いに助け合っていこうとする気持ちを育むことができた。

II 今後の課題

人権教育は、学校の教育活動全体で行われるものであり、日常生活に生かされていくものである。本校では、縦割り班や総合的な学習の時間などの活動の中で、いろいろな立場の人がいることを知り、ふれあう体験を通して人権意識や人権感覚の育成を図ってきた。人間関係が希薄化する現代では、様々な立場の人とふれあう経験が少なく、相手を思いやる心が育ちにくいと考えられるので、様々な人と交流する場を意図的に設定していくことが必要である。一度だけの活動で終わることなく、くり返し行うことによって互いの人間関係が深まり、助け合いや思いやりの心が育つ。系統的、計画的に活動し、さらに教科領域の目標や内容を人権教育の視点から見つめ、どんな力を育てていきたいかを明らかにしながら、それぞれの活動を充実したものにしていきたい。

III 人権コーナー設置の様子



人権コーナーには、全校で取り組んだ人権メッセージの代表作品や、縦割り班活動の活動カードを掲示している。縦割り班活動の前には各班長が連絡カードを貼り付け、どんな活動を計画しているのかを提示できるようにしている。班長である6年生のリーダー性を養い、下の学年の児童も目を通すことによって縦割り班への所属感を高める手立てとなっている。